

高齢者の意思決定に関する研究
選択逃避と自尊心との関係から

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

本研究では、高齢者の意思決定、とりわけ選択逃避(escape from choosing)と呼ばれる現象を扱った。選択逃避とは「リスク選択肢を含む選択を避けたり、選択自体を行わないことで、現状維持を図る行動」と定義できるが、その中の現象の一つに、省略エラー(omission error)がある。省略エラーとは、課題において無回答で間違ふことであり、この省略エラーに対して、回答の内容それ自体が間違っていた場合、つまり何らかの回答は行ったが、結局は誤答であった場合は、遂行エラー(commission error)と呼ばれている。

先行研究では、高齢者が選択逃避する原因として、「用心深い」「自信を喪失している」などが挙げられているが、何が加齢の影響で、何が高齢者に対するステレオタイプ(固定観念)なのかを区別することが重要であるといえる。本研究では、高齢者に対する固定観念を避けるために、自尊心(self-esteem, self-respect)を共通の尺度として用いた。今回の実験においては、高齢者の意思決定について、以下のような実験目的を設定した。加齢の影響を調べるため、高齢者と大学生の差を調べる 内的要因(自尊心)を調べることで、内的要因と選択(省略エラー)との間にどのような関係があるかを調べる。これらの目的を検証する際に、次の仮説を設定した。先行研究のように加齢に対する考察がステレオタイプであるならば、加齢の主効果は見られない 自尊心が高いほど、優越感が増し、省略エラーを行わない 反対に、自尊心が高いほど、遂行による失敗を恐れて、省略エラーが増える。

実験は、年齢群 2 群(大学生と高齢者)及び、自尊心の高・中・低(3条件)を被験者間要因とし、省略エラー・遂行エラー(2条件)を被験者内要因として行われた。言語学習課題としては、対連合学習課題(paired-associate learning task)を用いた。被験者は、自尊心を測定する尺度を含んだ質問紙に答えた後、パソコンに提示される対連合学習課題に取り組んだ。その際、エラー数と課題遂行時間が測定された。エラーに関して、結果にはエラー数ではなく、省略エラー率が分析の指標として用いられた。省略エラー率は、省略エラーと遂行エラーを合計した全体のエラー数における省略エラーの割合である。この数値を算出した理由は、今回の実験では、エラー数の多さを測定するのではなく、エラーに占める省略エラーの割合、すなわち選択逃避がどの程度行われていたかを測定することに主眼があったためである。エラー数だけでは、たとえ省略エラー数が多くても、同時に遂行エラー数も多ければ、選択逃避が起こったとはいえない。

結果は、高齢者、大学生ともに自尊心が高いほど遂行エラーが少なく、省略エラーが多かった。また選択逃避の指標となる省略エラー率に関していえば、自尊心が高いほどエラー率が増加し、特に大学生について統計的な優位性が認められた。しかし、加齢の差は自

自尊心高群でのみ認められたものの、高齢者と大学生全体の差は認められなかった。また課題遂行時間においても、自尊心が高くなるほど時間が短くなっており、大学生と高齢者では、大学生のほうが短かった。

これらの結果から、先行研究による一連の考察は、高齢者に対するステレオタイプから生じるものであることが示唆され、第一の仮説が立証された。また、自尊心が高いほど、優越感が増し、省略エラーを行わないだろう、という第二の仮説は棄却され、自尊心が高いほど、遂行による失敗を恐れて、省略エラーが増えるという第三の仮説が立証された。

これらの結果から、考察では、自尊心の低い人は、自己の努力や真面目さといった肯定的な自己を実験者に提示することによって、自尊心の一時的な維持を可能にし、逆に自尊心が高い人は、間違っで自尊心を傷つけるリスクを犯してまで努力して課題に取り組まなくても、自己完全性の全体的感覚を肯定化する多くの要因の中から、自己防衛するということが示唆される。

また、高齢者が、大学生と比べ省略エラー率が抑えられた理由については、自尊心の効力による自己の有能感に浸るようなナルシズムが抑えられており、それゆえ加齢の影響が「努力して」課題に取り組む姿勢に現れたのではないかと考えられる。このように、選択逃避は加齢に伴う高齢者特有の現象であるのではなく、自尊心のような内的要因による心理的機制によるものではないかと示唆される。